

令和 5 年度第 1 回屋久島世界遺産地域科学委員会  
ヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議  
議事概要

日時：令和 5 年 7 月 13 日(木) 14:00～17:00

場所：屋久島環境文化村センター

**議事（1）ヤクシカの生息状況等について**

■主な意見

- ・白谷雲水峡の急激な増加は信じられないが、なぜなのか。（手塚委員）  
→過年度にも寒冷・豪雪の年に白谷雲水峡で増加したことがあったため、今回もそうした影響で谷部に降りてきたのではないか。（(株)九州自然環境研究所塩谷顧問）  
→今年のデータだけでは判断がつかないため、次年度以降も追跡していく必要がある。（矢原座長）
- ・CPUE（捕獲効率）を見ると個体数の変動を捉えている印象。また、スレジカの発生については、銃器の場合と罠の場合で変わってくるのではないか。西部の罠による試験捕獲での捕獲効率や昼と夜のシカの出現状況を見ると、シカの警戒心が高まっているようには見えないため、罠の CPUE の変化は個体群のトレンドを表す指標になるのではないか。（濱崎委員）
- ・CPUE が指標になるかどうかは、推定個体数との関係をグラフで図示するとわかる。また、推定個体数の減少より CPUE の減少幅のほうが大きければスレジカの発生が考えられる。（松田委員）

**議事（2）捕獲等の被害防止対策について**

■主な意見

- ・協定捕獲区域については、各実施者の捕獲方法が異なり、事前調整しないとシャープシューティングの成果が下がるおそれもあるため、十分協議の上、行う必要がある。（鈴木委員）
- ・シカの被害は少なくなっているが、ポンカン・タンカンには 1 回被害を受けると数年実らない。単年度の被害ではなく、複数年被害が続くことも理解頂きたい。（岩川委員）  
→数値化は難しいかもしれないが、被害の見回りをしている担当課に伝え、見回りの際に注意して見てもらうようにする。（屋久島町）

- ・集落付近での捕獲においては、農林業被害の抑制だけでなく、ダニ媒介感染症等の人的被害の抑制も念頭に置く必要がある。(手塚委員)
  - ・シカはダニを増やすということで感染リスクを上げることが報告されている。島根県では、日本紅斑熱について、シカの数が減ると患者も減るという報告がある。また、ダニに噛まれてなくてもネコに傷つけられて SFTS にかかって亡くなった事例もあるため、ネコを錯誤捕獲した場合には注意する必要がある。(鈴木委員)
  - ・アメリカではオジロジカにコロナウイルスの感染がかなり広がっている。日本ではコロナウイルスについて人とシカとの行き来等の監視は行われていないか。(矢原座長)
- 知る限り情報はないが、調べてみる。(鈴木委員)
- ・4,240 頭の捕獲は実際に実現可能か。またできなかった場合、どのような対応になるか。(八代田委員)
- 現実的に不可能と思う。国の令和 5 年度以降の動きを見据えて対応を考えていきたい。(鹿児島県)
- ・シミュレーションについて性比はどのように設定しているのか。(濱崎委員)
- 現在の捕獲性比から設定している。しかし、雌の方がとれにくくなっている感じがあるため、実際のメスの性比は捕獲の性比より大きい可能性もある。((株)九州自然環境研究所 塩谷顧問)
- ・捕獲の効果測定が非常に重要。例えばセンサーカメラを設置して経年や捕獲前後の撮影頻度や警戒心の変化等を明らかにし、捕獲効果の評価ができる形でモニタリングする必要がある。センサーカメラは色々な情報が得られるため活用してほしい。(濱崎委員)
  - ・造林地へのシカ柵設置は費用がかかるため、シカの密度の低い皆伐地で柵を設置しないで成林するというのは非常に大きな成果になる。(八代田委員)

### 議事（3）森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング等について

#### ■主な意見

- ・柵外の被度の方が柵内より高い結果もあるが、写真を見ると、光環境の違いが影響しているようである。ただ、長期的に見れば多少光環境が悪いところでもシカの食害がなければ回復していくはずなので、この調査を長期的に続ける中で判断していけばよい。(矢原座長)
- ・委員からの補足説明がないとうまく説明できないという状況はよくない。光環境もあるし、他の植物の被覆の影響もあり得る。光環境や他の植物の被度等も示していかないと結果が解釈できない。(湯本委員)

- ・柵内外の植生調査結果と比較できるよう、保護柵設置箇所におけるシカの密度指標のようなものを示せないか。(杉浦委員)

→保護柵から一番近い場所の糞粒データを示すと判断しやすくなるのでは。(矢原座長)

- ・今回のデータは昨年度未報告部分であったが、前回報告も含めると全体的には回復傾向がよく評価できていると思う。次回調査の際に光環境の違い等を確認・示してもらえると今後の評価でもう少し正確な判断ができると思う。(矢原座長)

#### 議事（４）特定エリアの対策（西部地域）について

##### ■主な意見

- ・撮影結果を見ると、生まれた個体はそこそこ生き残っているようである。(鈴木委員)
- ・生存率もよいのになぜ西部で個体数が減少しているという情報になるのか。(松田委員)
- ・西部地域全てを一樣に考えない方がよいのでは。また、もしメスが毎年出産し、子ジカもそう死んでいないとすると、子ジカの撮影比率が低いのは疑問である。(杉浦委員)
- ・その部分は確かに不思議なので、カメラの状況や生態学的な観点からきちんと見ていく必要がある。(鈴木委員)
- ・これだけのセンサーカメラを年間稼働させて効果測定している例を知らない。これにより活動の季節性、捕獲適期、出没時間帯や、捕獲によって警戒心が大きく上がってもいいことがわかってきており、非常に貴重なデータが得られている。ぜひ続けて頂きたい。(濱崎委員)
- ・1 時間以内に再撮影された個体を同一個体とみなして除外しているようであるが、除外しているデータの割合はどの程度か。撮影頻度が非常に高いところでは、除外データが多くなり、過小評価されることが懸念される。(濱崎委員)
- ・できれば鹿児島県や九州森林管理局でのカメラ調査の結果とも比較できるようにカメラの設置条件やデータ処理については協議して合わせて頂くとよい。(濱崎委員)
- ・捕獲後に撮影数が増えているところ（C32）があるのはなぜか。(矢原座長)

→推測だが、誘引個体が全て捕獲されるわけではないため、捕獲されなかった誘引個体が餌を求めてウロウロしているところを撮影されている可能性が考えられる。(環境省)

- ・捕獲実施箇所で高い撮影頻度を維持しているということは、捕獲後に移入があるのではないか。(矢原座長)

→捕獲によって、雄が取り除かれた場合、周囲から雄が移入することは考えられるが、急激な上昇が見られるため、移入による個体数回復だけでなく、活動性の高い個体が入ってき

ている可能性やその時期の季節的な動きの変化も合わせて考えていかないと説明は難しい。

(濱崎委員)

- ・幼獣の死亡率を推測する方法はないか。(矢原座長)

→幼獣の死亡率を推定する方法としてセンサーカメラから子連れ率をモニタリングしていく方法がある。(濱崎委員)

## 議事（５）管理計画に基づく管理状況の評価について

### ■主な意見

- ・「調査対象種全体で見ると、生育地点数や個体数に減少は見られない」とあるが、生育地点数は減少しているのではないか。多くの屋久島固有種でシカの採食によって生育地点数が減っている。また個体数も減っているはずである。(矢原座長)

→改めて確認する。必要があれば修正したい。(環境省)

- ・今後の遺産地域の管理の方向性について、低地照葉樹林の重要性、保護の強化を明記するという理解でよいか。(手塚委員)

- ・遺産地域の拡大またはバッファゾーンの拡大に踏み込んでいくという考えはあるか。(荒田委員)

→低地照葉樹林については委員からの意見を踏まえて記載した。公園外や遺産区域外での希少な低地照葉樹林などの管理をやっていくことは、考えとしてある。また世界遺産の価値に値するところから遺産地域の拡張にもつながっていくと思うが、まずは国立公園として保護・担保すべき場所を把握し、その場所の土地所有権や森林施業等を踏まえ、連携しながら公園計画を考えていきたい。(環境省)

- ・ヤクシカ対策はうまくいっているように見えるが、捕獲数が増えていないのに推定個体数が減っているのが釈然としない部分である。(松田委員)
- ・絶滅危惧植物の視点からは高標高地の捕獲が重要だが、捕獲してないにも関わらず、密度が下がり、回復傾向にある希少種もある。高標高地のシカが降りてきている可能性も考えられる。(矢原座長)